

コンコードとの交流について

七飯町生涯教育課 山田 央

はじめに

2010年10月11日から21日までの11日間の日程で行われた海外交流研修は、姉妹都市である米国マサチューセッツ州コンコード町へ中学生5名、高校生3名、引率教員1名、町内商業関係者3名そして役場職員2名の計14名で訪問した。

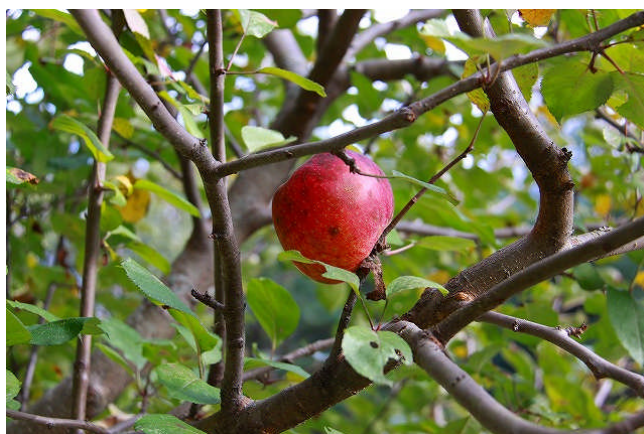
交流研修の目的は、文化・スポーツ・産業・経済等による交流を通じ国際理解とグローバルな国際視野に立つ豊かな人材を育成することにあるが、参加者それぞれが持つ目的意識は、研修の過程にあり、その成果は、さらに将来へ向けて設定される新たな目的へと繋がった時に、はじめて問われるものと思われる。

因みに、私が今回の訪問において自身へ課した目的は「コンコードという町を知ること」「コンコードについて広く町民に伝えること」「将来を担う子供たちを無事に帰国させること」の3つである。よって「伝える」という目的が、帰国後から遂行されるものである為、その目的が十分に果されていないと考える。そういった意味で、私にとっての研修はまだ終わっていないと理解しているので、本報告はあくまで中間的なものと捉えている。

さて、報告に先立ち、我々14名を温かく迎えてくださったコンコードのホストファミリーの方々、そして、今回の研修の準備に奔走されたCCNN（コンコード・カーライル・七飯ネットワーク）の皆様には、この場を借りて心より御礼申し上げます。我々が充実した研修を無事に終えることが出来たのは、偏に皆様の心遣いによるものです。

コンコードという町

コンコードという町は、1635年に先住の人々から平和的に土地を得て、町としての母体が始まったといわれます。しかしながら、それ以前からヒトが住んでいたということは、コンコード・ミュージアムに収蔵・展示されている考古遺物からも明確で、日本で言うところの縄文時代に対比される時代からすでに生活の痕跡が見つかることが伺えるし、日本同様に石鏃や土器などが発掘されている面から考えても、コンコードの先史時代では、狩猟・採集を基盤にした生活様式であったと想像できる。



コンコードでみかけたリンゴの木

他民族（ネイティブアメリカン）から平和交渉によって土地を得ているというコンコード町の始まり方は、一方で、略奪的に土地を占有した歴史をもつ他の地域に比べると、コンコードの先人たちの英断と意識の高さが感じられ、素晴らしい歴史を持つ町としての印

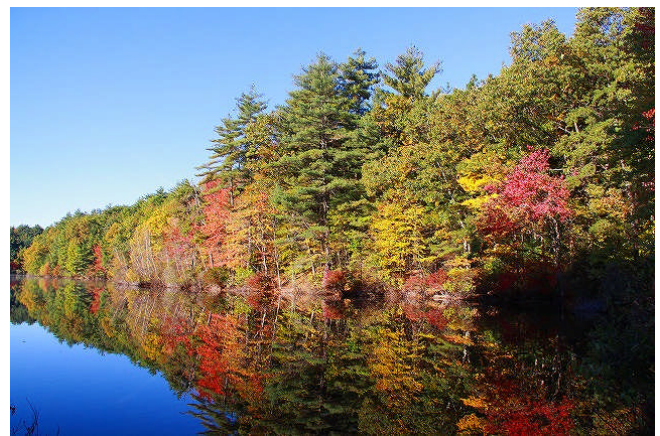
象を受けた。このような意識や他民族への理解を持つ歴史が「調和」というものを重んじる風潮や、遠い日本の七飯町への理解を持とうという意識にも繋がっているように感じた。さらに潜在的にある彼らの「調和」の心は、ヒトに限らず自然や歴史へも向けられているようで、町の至るところに巨樹・大木が見られることや、多くの自然が、現在生活をしているヒトと共存する形で残されていること、明治期から変わらない作り方の牧柵が今も使われ続けているなど、町のあちこちで、過去と現在が調和するように混在しているのが印象的であった。

さらに、自然分野に焦点をあてると、私がコンコードで見てきた樹木の種類や野鳥、そして、過ごした日々の気温などから七飯町と似た気候であることが伺えた。ただ、樹木に関しては、七飯町よりもやや北側に多く見られるものが、平地で確認されたため、やや寒冷なのかもしれない。

また、コンコードのあちこちで見られる湿地や湖沼は、あたかも七飯町を代表する景勝地「大沼」を彷彿とさせる。恐らく、これまでの交流の中で行き来した両町の多くの人が、このような環境について似ていると感じたことと思う。

しかしながら、コンコードには七飯町にあるような駒ヶ岳や横津岳のような高い山が存在せず、緩やかな丘陵があちこちにみられる程度であり、同じ内陸に位置するコンコード町と七飯町は、眺望という点で異なった印象を受けたこと、また、傾斜があまりない環境のためか、町でみられる川は緩やかに流れ、時が止まったかのような錯覚に陥るほど穏やかな雰囲気を感じられたことなど、マクロ的に町を観察するとその違いは明確だった。

個人的には、コンコード町の自然を眺めてきた中で「ウォールデン・ポンド」と呼ばれる湖がとても美しく印象的だった。大沼に比べると小さな湖であったが、とても透明度が高く、現地の方々が泳いでいる姿を目にしたほどである。また、湖のまわりを取り囲む広葉樹や針葉樹が森を形成し、多くのリス達が走り回るといった環境は、七飯町で余り見ることが出来なくなった光景のように感じた。



紅葉の美しかったウォールデン・ポンド

コンコードで培われた自然はとても美しかった。現在、七飯町で大沼の水質改善に取り組んでいるが、水質だけではなく周りの環境から整え、長期的に歴史の感じられる町や自然を残すことも必要なのではないかと考えさせられた。

コンコードの人々

今回の交流で出会ったコンコードの人々は、皆温厚で優しかった。このことは、七飯町が国際交流事業として、コンコード町と親交を深めるようになり13年という年月を費やしているひとつの成果とも考えられる。この間に培われた両者の親交が親密なものであることを私たち訪問団はすぐに感じた。彼らは非常に友好的で、我々に不便を生じないように

ホームステイ先の選定から、細かなタイムスケジュールの作成など、見えない努力を惜しまずに動いてくれたのだと感じた。

私がお世話になったホストファミリーは、コンコード・カーライル高校で教師をしているディビット氏の一家でした。とても紳士的で、私が片言の英語で話すのに対し、彼は片言の日本語で対応してくれました。なんとかお互いに対話するのに必死な感じは否めませんでした。日数を経るごとに、会話が通じなくても、思いは伝わっていたように感じました。また、彼は、私の職業が学芸員ということを配慮してくれ、時間を作ってボストン市内のサイエンス・ミュージアムなどへ連れて行ってくれましたし、アメリカで一番おいしいと評判のハンバーガー屋へも連れて行ってくれました。お陰で、色々な意味で、この研修が稔りあるものとなりました。この場を借りて、ディビット夫妻には感謝すると共に、今回ここまでの接遇を受けることができたのも、これまでの交流事業の恩恵と思います。

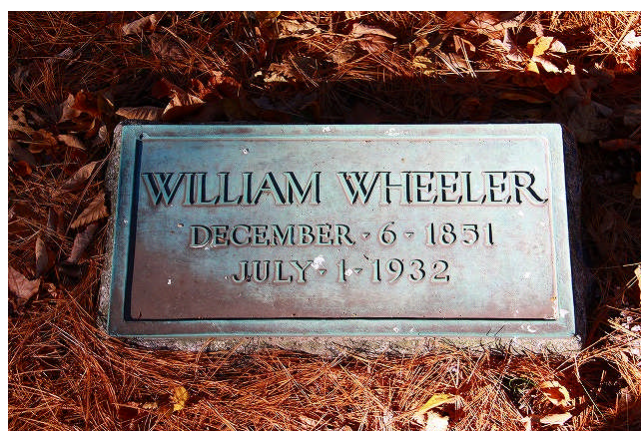


コンコード・ミュージアム

研修内容について

これまで、多くの方々がコンコードでの研修成果について報告しているのので、本報告では、アメリカ独立戦争勃発地であるオールド・ノースブリッジやミニットマンの銅像、「若草物語」に関係するオーチャードハウスについては割愛する。

これまでの研修で報告されなかった事柄として、学芸員という立場でコンコード・ミュージアムを訪れ、キュレーター（学芸員）のディビッド・F・ウッド氏に展示資料の解説や博物館運営、資料の保管環境などご教授いただいた。また、特別にバックヤード（収蔵室）を見学させていただき、普段見せることがないという一振りの日本刀とアイヌのものと思われる弓矢を見させていただいた。どちらも 1850 年ころ日本から持ってきたものといわれているので、とても興味深く、どのような経路によってコンコードに至ったのか想像するとワクワクした。日本からもたらされたこれらの資料に関して、個人的な所見をいくつか申し述べさせていただき、お互い何らかの資料が見つかったら連絡することを約束した。



スリーピーホローにあるホイラーの墓

ほかに、コンコード町内にある墓地にウィリアム・ホイラーの墓があることを知っていたので見学に連れて行って頂いた。ホイラーはコンコード出身で、明治時代はじめに北海道の開拓の為に雇われた外国人教師の一人で、札幌にある時計台の設計や、北海道大学の2代目教頭として尽力した。七飯町とは、明治期に2件建てられた家畜房といわれる建造物の基本となる設計をした人物として関わりがある。これまで写真ではみていたが、実際にホイラーの墓を見ることが出来とても感慨深いものがあった。

また、あわせてホイラーが晩年に住んだという家がまだ残っていることを知り、その場所まで案内してもらった。長い年月が過ぎても現役で建物が残っていることにも驚いたが、改めて歴史を大切に作る気風を感じずにはいられなかった。

今回の研修目的の一つである「コンコードという町を知ること」に関して、限られた期間であったため、なかなかその成果をあげることが出来なかったと反省しているが、見るもの感じるもの全てが新鮮で、異文化を知ることが、すなわち自分たちの文化やいま現在を知ることに繋がるのだということを痛感した研修だった。

交流のこれから

大辞泉によれば、交流とは「互いに行き来すること。特に、異なる地域・組織・系統の人々が行き来すること。また、その間でさまざまな物事のやりとりが行われること。」とある。確かに今回の交流事業の目的に違わないものである。しかしながら、今回の研修に参加させて頂き、そろそろ人の行き来という交流だけではなく、両町が教育的にも経済的にもさらに発展する為に「何か」をできるのではないかとこの可能性を感じた。冒頭で述べたような、コンコード町を訪れた者だけが、その先に新たな目標設定を持てる場を創作することも必要だが、お互いの町が「交流」の概念から一歩進み、それがどのような分野であるにせよ、お互いの町の発展の為に協同できる「何か」を模索する時期に来ているのではないかと思った。 実際、個々の交流はこの「何か」をなす為の裾野を広げる為には必要なことであるが、その先のビジョンがないと、いつもと変わらない事務的なイベントに陥ってしまうのではないかと懸念した。以上、今後の課題を含め報告とする。